

南山に関する文献目録

—糸満市文化財保護委員会による南山城跡調査メモから—

新田重清*

1. はじめに

去る2月22日から28日にかけて、糸満市文化財保護委員会による南山城跡の調査が行なわれたが、筆者も委員の一人として参加した。

調査は城跡の平面実測と南山（城）に関する遺跡（グスク・拝所・古村落）の分布確認、および文献収集を行なった。城跡の平面実測は、大正4年頃も行なわれたようで、この頃、編纂された「南山の歴史」に収録されている。今回は、これを手がかりにして新たに実測されたものである。

周辺の関連する遺跡の分布調査は、民俗学的調査と並行して行なわれる予定であったが、今回は諸事情のため実施は出来なかった。期日を改めて実施されることとおもわれる。

筆者は、南山に関する文献的収集を主として担当したが、年度末の忙しさと管見により貴重な文献であるにもかかわらず、見落としているものがあるとおもわれる。先学・諸兄のご教示を得て増補し、完稿していきたい。

ここに不完全ながらも、手元にある文献目録を作成し、後日のためのステップにしたい。

末尾ながら恐縮ですが、文献収集については県立図書館司書富島壯英氏のご協力があり、測量・調査については教育庁文化課専門員知念勇氏からご助言をうけた。本稿作成については、糸満市教育委員会および糸満市文化財保護委員会の指導とご支援をうけた。

ここに銘記して、衷心より感謝いたします。

なお、南山城跡の測量、および写真撮影は、次のメンバーによって行なわれた。

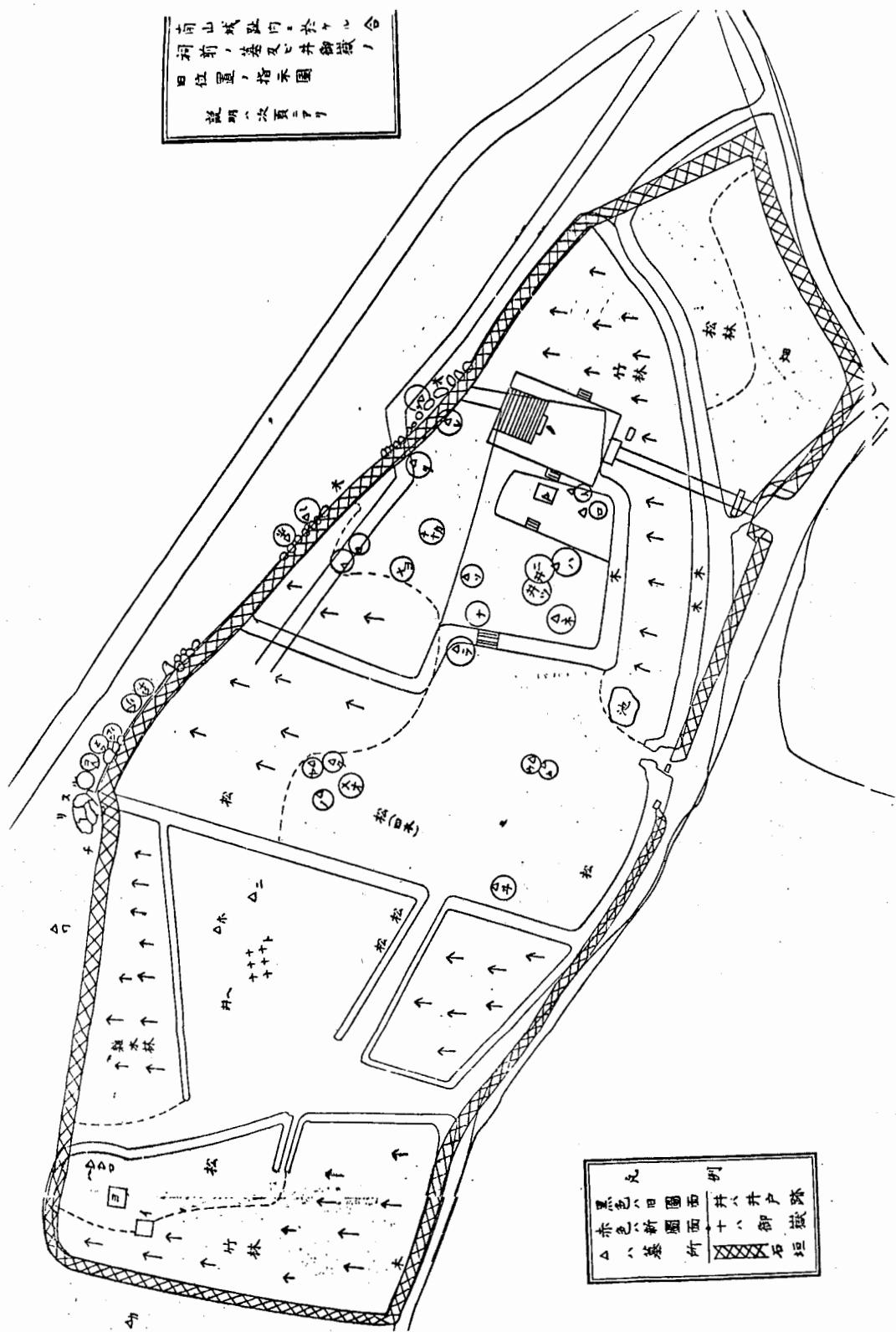
糸満市文化財保護委員会

委 員 長	島 袋 良 徳
委 員	新 田 重 清
社会教育主事	金 城 良 勝 (写真担当)
非常勤職員	稻 嶺 盛 和 (総 務)
"	山 田 正 (測 量)
"	上 原 晴 喜 (")
"	奥 川 朝 弘 (")

糸満市教育委員会

施 設 係 長	長 嶺 輝 一 (測 量)
施 設	金 城 秀 樹 (")
"	玉 城 寿 雄 (")

第1図 南山城跡（郷土史、昭和9年より）



南山城趾内ノ舊位置説明 (前頁の地図の説明)

山川ノ口殿内ノ部

- (イ) 山川の口殿内の口クサイ御本親
- (ロ) 上ノ門御宮ノ一番目御元祖ノクサイ御本親
- (ハ) 上ノ門御宮ノ一番目御先祖ノ御本親
(玉城村仲村渠ミントンノ御先祖の子孫)
- (ニ) 上ノ門コープー川
(玉城村仲村渠ミントンノ世ヨリ来ル御仕立ノ御川)
- (ホ) 上村渠ノ御持前御本親
- (ヘ) 山川ノ口殿内御持前墓
- (ト) 上村渠 下モ 上ノ門ノ三腹ノ入込御墓
- (チ) 上ノ門御宮ニ三番目御先祖英祖王ノクサイ御墓
- (リ) 全 上
- (ヌ) 全 上
- (ル) 上ノ門御宮ノ四番目御先祖尚察度王クサイ本親
- (ヲ) 上ノ門御宮ノ三番目御先祖英祖王クサイ御本親
- (ワ) 上ノ門御宮ノ一番目御先祖クサイ御本親
- (カ) 玉寄ノ御嶽
- (ヨ) 上ノ門ノ御嶽 オミチモン
(伊平屋今帰仁ヘノ御通ノ御嶽ミチモン)
- (タ) 上ノ門ノ御宮ノ一番目御先祖クサイ御本親
- (レ) 上ノ門御宮ノ一番目御先祖クサイ御本親岳御主
- (ソ) 下モノ御持前御墓
- (ツ) 山川ノ口殿内ノノ口御川
- (ネ) 上ノ門御宮ノ一番目ノ御先祖ノクサイ御本親
- (ハ) 下モ腹ノオミツモン
- (ラ) 下茂腹ノ御持前御墓
- (ム) ノロ殿内ノ御持前ノ御本親
- (ウ) 上ノ門御宮ノ二番目御先祖ノクサイ御本親
- (ヰ) 上ノ門御宮ノ二番目御先祖ノクサイ御本親
- (ノ) 上ノ門御宮ノ二番目御先祖ノ御本親
(中城村字安谷屋ヨリ参ル子孫萬代ノ按司墓)
- (オ) 上ノ門御持ノ萬代の按司ノ御仕立ノ御岳
- (ク) 屋比久腹御持前ノ御本親
- (ヤ) 下茂腹御持前ノ御本親
- (マ) 舊御宮

西銘ノ部

- (イ) 控所ニシテ此処ニテ手水ヲ使ヒテ御祭ヲナス所
(南山神ソコノ初リ大仲村渠大君加那志)
- (ロ) 南山御先祖ノ御墓
(西銘ソージ神元越来元山城御持前御墓)
- (ハ) 西銘神元越来與座下モ腹ノ御持前墓
- (ニ) 南山ノロスク生レタル オミナイ御墓
南山ノクバ王内御墓
ウミナイビ西銘ノ持前
ウユーメドミ越来ノ持前
- (ホ) 南山クバ王御嶽入口ノ御岳ノ御墓
西銘及ビ越来ノ持前
- (ヘ) 南山ノ仲トンノ御岳 (仲毛御岳)
(南山仲毛御岳ノオミチ物ノ後ニクルマ御川アリ)
- (ト) 南山ノクバ王御岳
- (チ) 神元 越来ノ持前ノ御墓
- (リ) 越来西銘ノ御持オミナイビノ御長子ノ御墓
- (ヌ) 西銘ノ御持ノ南山ノウミナイビノ御子ノ御墓
- (ル) 神元ノ御持ノ岳御主南山王ノ二代目ノ御接司墓
- (ヲ) 南川端小腹御持前ノ先祖墓
- (ワ) 小渡腹御持前墓
- (カ) 物見城 (一名鳥山トモ云フ)
- (ヨ) 舊御宮

2. 城跡の測量

南山城跡は、14～15世紀頃栄えた南山の王城であったが、中山の尚巴志により併合されて滅亡した。

爾来、廢城となり現在に至っているが、1719年尚敬王の冊封使（副使）として来島した徐模光の子孫・那姓なる者が城の一画に住んでいたことが誌されている。なお、「高嶺城」（南山城の別称筆者註）の詩文中に往事の片鱗をみることができる。

参考までに摘記する。

高嶺の余は、空墨なり
瓦松は生じて、墻を繚らす
凶を披げ、往蹟を尋ね
馬に策て、荒岡を踏む
文砌は、豨と楯とに支れ
宮溝は、雁梁を渦す
中原人、一たび到れば
徒に、斜陽に倚り立つ

（周煌琉球国志略 訳注 平田嗣全 三一書房 1977年）

ところで、大正4年頃、城跡内に散在していた御獄・墓所を東側の一画にあつめて整地し、学校を移築しているが、この際に城跡の輪郭と遺構が簡単に実測されている（第1図 南山城跡）。

この図面には、黒色（旧図面）と赤色（新図面）との色別により、旧図面と新図面とが重ね合わされている。原図は見たことがなく、コピーしか所持していないので確言し難いが、北側と東側の石垣の一部は南山時代の遺構と考えられ、城跡内にもいくつかの建造物の遺構があったものと思われる。

また、南山城跡の地形や周辺の状況から判断して正殿（唐破風）は、東側の現在、南山神社あたりにもあったものとおもわれる。門は図面によると南側にもあるが、当時の村落跡や貿易港としての糸満が西側に位置する点から考えて、正門は西側にあったものと推定される。

今度の糸満市文化財保護委員会による測量は、 $\frac{1}{250}$ の現況実測図である。

これら両方の図面を基に、さらに考古学的遺構調査を実施すれば、その全貌が明らかにされることがと思われる。

是非、第二次の調査を企画していただきたい。

3. 城跡周辺の拝所（拝泉）と衛星的グスク

大正4年頃まで、城跡内に所在していた御獄および墓所については旧図面に記録されているが、学校移築の際、整理されて跡形もなく変貌している。

南山城跡周辺には、拝所（拝泉も含めて）が数多く所在し、また「南山城」をとり囲むように衛星的グスクが分布している。

地籍図を頼りに、御獄・墓所・拝泉を踏査してみると、御獄が7カ所、墓所が2カ所、拝泉が5カ所にある。

琉球国由来記（巻十二）や舊記に記録されている屋古邑の拝所は、次のとおりである。

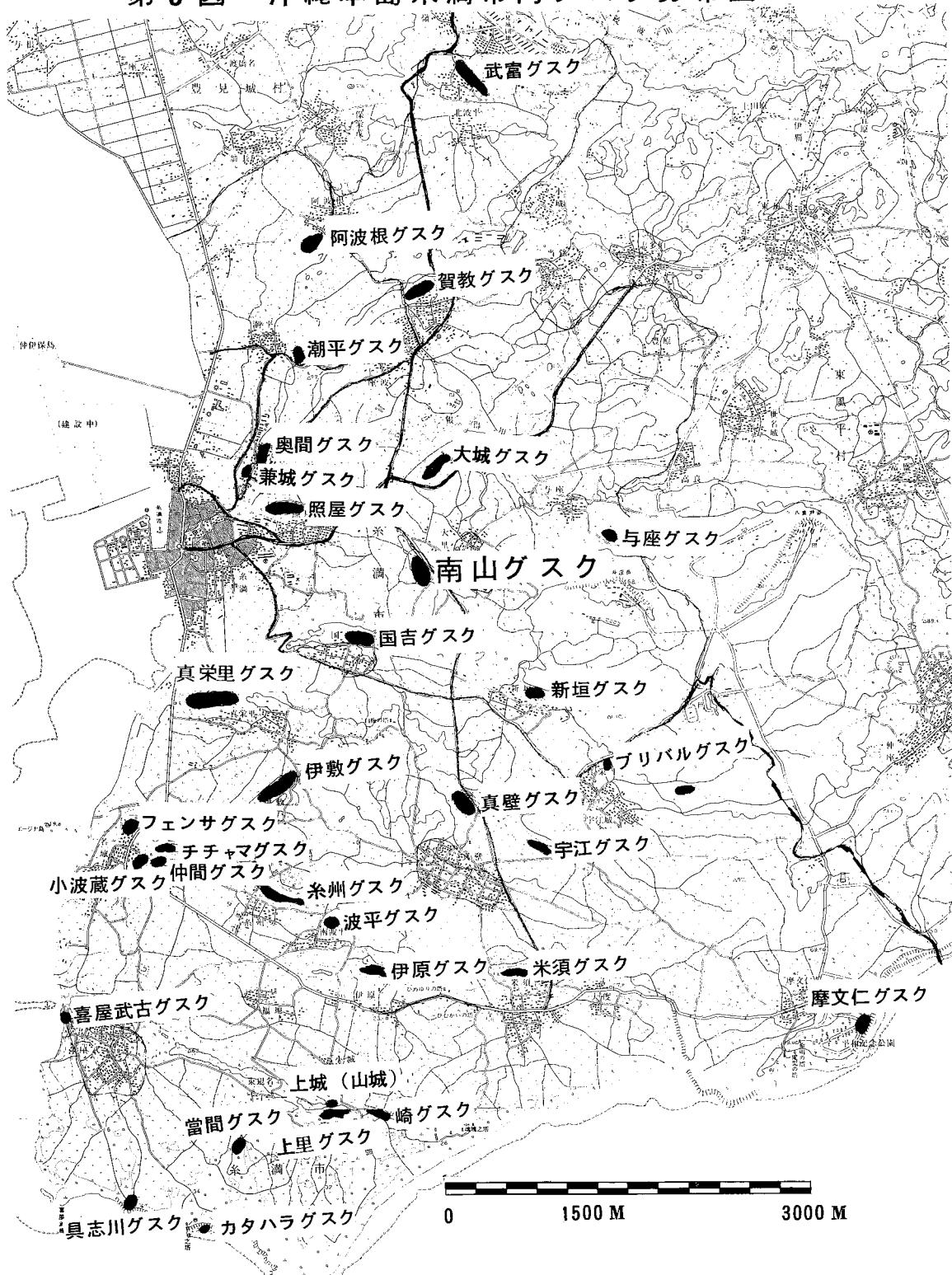
由來記

1. 大嶽 神名、玉寄御イベヅカサ

第2図 南山城跡と周辺の拝所



第3図 沖縄本島糸満市内グスク分布図



2. 小嶽 神名，マゲライノ御神ヅカサ 右貳御前，城内ニアリ。（此城，往昔国土三分之時，日山南山王城）島尻大里巫祟所。
3. 中森 貳御前
壹御前，神名，サバネコノヨラミサツカサ
壹御前，神名，ヨラミサノ御イベ
4. ナシマ嶽 貳御前
壹御前，神名，ナデルワノ御神ヅカサ
壹御前，神名，コバノ若ヅカサ
右四ヶ所，大村渠巫祟所。
5. アカルマ嶽
神名，マシラタイノ御神ヅカサ
從公儀，祈願無之，村中ヨリ崇之。
6. 屋古嶽 貳御前
(公義祈願無之，村中崇之)
壹御前，神名，北谷ノ御イベヅカサ
壹御前，神名，マイストノ御イベヅカサ
右者，島尻大里巫祟所。
琉球国舊記附卷之一 神殿
 1. 島尻大里城内ニ殿
 2. 揚間殿
 3. 神谷殿
 4. 中森殿
 5. 屋城殿
 6. 下久志堅殿
 7. 我那覇殿
 8. 印萬殿（以上九殿・在屋古邑）

ところで，地籍図に記録されている御嶽と文献に記載されている御嶽との照合ならびに比較検討は，是非必要であるが，今回の調査では手が届かなかった。

したがって，文献上の御嶽名が，具体的にどの拝所に比定されるか分明することが出来なかつたので，一応仮Naを付すこととした。今後，追跡すべき作業である。

糸満市には「グスク」と呼ばれている所が3~4カ所知られている。機能的には，聖域的（墓所・御嶽）なもの，集落的なもの，城的（支配者の居城）なもの，倉庫としてのグスク等が論考されている。ともあれ，南山城跡の周辺には，その衛星的グスクと考定しうるグスクが数カ所確認できる。この分布は，南山グスクをとり囲むように，東に「八重瀬グスク」，北に「大城グスク（別名 ウンチューグスク）」，西に「照屋グスク」，南に「国吉グスク」・「真壁グスク」・「上里グスク」等であるが，時代的には同時に展開したグスクであり，南山城の支城的役割をもっていたかどうかは今後の課題にしたいが，相互に関連するグスクであったことには間違いなからうと思われる。

この問題については，本稿で検討する余裕がないので，後日，改めて検討してみたい。

4. 南山に関する文献目録

(1) 史 料

- ◎ 「大明一統志」卷 89 錄自 臺灣文献叢刊第 196 種 流求與鴉龍山 諸家所収、台灣銀行經濟研究室編
- ◎ 「西洋朝貢典錄」卷上第 9 錄自 錄自 " "
- ◎ 「武備志」卷 236 錄自 " "
- ◎ 「潛確居類書」卷 13 錄自 " "
- ◎ 「明史稿」卷 302 (列伝第 197) 錄自 " "
- ◎ 「明史」卷 323 (列伝第 211) 錄自 " "
- ◎ 「続文献通考」卷 238 錄自 " "
- ◎ 「欽定統通典」卷 147 錄自 " "
- ◎ 「明実錄の沖縄史料 (一)」 和田久徳 お茶の水女子大学人文科学紀要 第 24 卷 1971 年
- ◎ 「明実錄の沖縄史料 (二)」 和田久徳 南島史学 創刊号 1972 年
- ◎ 「李朝実錄琉球史料第一集」嘉手納宗徳 球陽研究会 1971 年
- ◎ 「朝鮮李朝実錄所載の琉球諸島関係資料」李熙永 沖縄学の課題 木耳社 昭和 47 年
- ◎ 「歴代宝案」卷 43 起洪済元年 至正統 5 年

(2) 参考資料

- ◎ 「中山世譜」卷 3 ・ 卷 4 琉球史料叢書四 東京美術 昭和 47 年
- ◎ 「中山世鑑」 琉球史料叢書五 東京美術 昭和 47 年
- ◎ 「琉球国舊記」琉球史料叢書三 " "
- ◎ 「琉球国由来記」下 琉球史料叢書二 " "
- ◎ 「球陽」 球陽研究会編 角川書店 昭和 49 年

(3) 論文・調査報告 (グスク時代に関連するものも含めて)

a - 考古学的分野 -

- ◎ 「照屋城趾・南山城趾出土の考古資料」 鎌倉芳太郎 南海古陶瓷 国書刊行会 昭和 51 年
- ◎ 「『グシク』についての試論」 嵩元政秀 琉大史学創刊号 1969 年
- ◎ 「沖縄における原始社会の終末期」 嵩元政秀 南島史論－富村真演教授還暦記念論文集－ 琉球大学史学会 1972 年
- ◎ 「再び『グシク』について」 嵩元政秀 古代文化 23 卷第 9 ・ 10 号 古代学協会 昭和 46 年
- ◎ 「沖縄のグスク」 嵩元政秀 日本古代文化の探究 城 社会思想社 昭和 52 年
- ◎ 「沖縄のグシク」 当真嗣一 考古資料の見方 (遺跡編) 柏書房 1977 年
- ◎ 「沖縄における鉄滓遺跡と鉄器の諸問題について」 当真嗣一 琉大史学第 2 号 昭和 46 年
- ◎ 「沖縄における原始共同体の解体過程 (試論)」 安里進 沖縄歴史研究 11 号, 沖縄歴史研

究会 1974 年

- ◎ 「沖縄原始社会史研究の諸問題－考古学的成果を中心に－」 高良倉吉 沖縄歴史研究 10 号
1973 年
- ◎ 「古墳文化の地域的特色 沖縄」 高宮広衛 日本の考古学 IV 河出書房 昭和 41 年
- ◎ 「『グシク』をめぐる問題」 国分直一 南島考古創刊号 沖縄考古学会 1970 年
- ◎ 「再グシク考」 友寄英一郎 南島考古第 4 号 沖縄考古学会 1975 年
- ◎ 「琉球における原史時代の編年」 (1 ~ 14) 安里進 琉球新報 1972.12.5 ~ 12.7
- ◎ 「沖縄出土の中世中国陶磁について」 三上次男 琉大史学第 8 号 琉球大学史学会 1976 年
- ◎ 「日本出土の元様式青花磁器について－沖縄、とくに勝連城の出土品を中心にして－」 知部良明 南島考古第 4 号 沖縄考古学会 1975 年
- ◎ 「南島の須恵器」 佐藤伸二 沖縄の社会と習俗 東京大学出版会 1970 年
- ◎ 「陶質の壺とガラスの玉」 白木原和美 古代文化 23 卷第 9 ・ 10 号 古代学協会 昭和 46 年
- ◎ 「類須恵器の出自について」 白木原和美 法文論叢第 35 号 熊本大学法文学会
- ◎ 「類須恵器集成」 白木原和美 南日本文化 第 6 号
- ◎ 「南島資料 (一) 須恵器の焼成地と年代」 三島格 古代文化 23 卷第 9 ・ 10 号 古代学協会 昭和 46 年
- ◎ 「勝連城跡第一次調査報告書」 琉球政府文化財保護委員会 1965 年
- ◎ 「勝連城跡第二次調査報告書」 琉球政府文化財保護委員会 1966 年
- ◎ 「ヒニ城の調査報告」 嵩元政秀 琉球文化財調査報告書 1966 年
- ◎ 「フエンサ城貝塚調査概報」 友寄英一郎・嵩元政秀 琉球大学文学部紀要社会編第 13 号
1969 年
- ◎ 「沖縄における炭化米・炭化大麦出土遺跡－糸数城跡調査報告－」 安里進 考古学ジャーナル
No.32 1969 年
- ◎ 「グシク (城) 出土牛骨歯について」 友寄英一郎・嵩元政秀 南島考古第 3 号 1973 年
- ◎ 「具志川市具志川城跡表採の考古資料について」 新田重清 沖縄県立博物館報 No.7
1974 年
- ◎ 「石川市伊波後原遺跡調査概報」 当真嗣一 南島考古第 4 号 1975 年
- ◎ 「勝連城の発掘調査」 知念勇 琉球の文化 琉球文化社 1972 年
- ◎ 「沖縄における原史時代の研究 第 2 回－晚期土器の編年と文化の波及について－」 第 19
回琉大祭研究発表要旨 琉大考古学研究会 1969 年
- ◎ 「糸満町新垣村落形成過程」 第 20 回琉大祭研究発表内容要旨 琉大考古学研究会 1970 年
- ◎ 「稻福村落の歴史」 沖縄考古学研究会連合 1971 年
 - b - 歴史学的分野 -
- ◎ 「南山王の朝鮮亡命－『李朝実録』所載の史実によって書直された南山の歴史－」 伊波普猷
伊波普猷全集第 7 卷 平凡社 昭和 50 年
- ◎ 「琉球国の三山統一についての新考察」 和田久徳 お茶の水女子大学人文科学紀要第 28 卷
昭和 50 年

- ◎ 「鎮西八郎（上）」 石川文一 琉球第6号 1957年
- ◎ 「鎮西八郎（下）」 " 琉球第7号 1958年
- ◎ 「島添大里下の世主」 留宇宙亭 琉球第8号 1958年
- ◎ 「史跡に現われた三山の争乱とその統一」 稲村賢敷 琉球第12号 1961年
- ◎ 「南山遠望」 渡口真清 琉球第13号 1963年
- ◎ 「王城の変遷」 石川文一 琉球第16号 昭和47年
- ◎ 「南山の紛争」 留宇宙亭 研究余滴 球陽研究会 1971年
- ◎ 「球陽漫歩（一）三山分立その他」、「球陽漫歩（二）球陽卷二 尚思紹王二年の記事」、「山南王雜感」 嘉手納宗徳 研究余滴 球陽研究会 1971年
- ◎ 「明清両朝と琉球王国交渉史の研究－琉球国王冊封の史実について－」 陳哲雄 琉大史学第8号 1976年
- ◎ 「明清両朝と琉球王国交渉史の研究(2)－琉球語と中国語の関係史実について－」 陳哲雄 琉大史学第9号 1977年
- ◎ 「南山興亡史（1～11）」 石川文一 琉球新報 1969.8.29～
c - 民族学的分野 -
- ◎ 「琉球宗教史の研究」 鳥越憲三郎 角川書店 昭和40年
- ◎ 「再『グスク』考」 仲松弥秀 南島考古第3号 沖縄考古学会 1973年
- ◎ 「神と村」 仲松弥秀 伝統と現代社 1975年
- ◎ 「古層の村」 仲松弥秀 沖縄タイムス社 1977年
- ◎ 「神・共同体・豊穣」 村武精一 未来社 1975年

(4) おもろとしもしまじり（糸満）

-おもろに登場する「しもしまじり（糸満）」の地名と人物-

- ◎ 1-12 しましり
- ◎ 5-46 しまちり
- ◎ 6-41 下の世のぬし
- ◎ 8-17 米すとの
- ◎ 8-24 こめす世のぬし・ま物世のぬし
- ◎ 8-45 しましり
- ◎ 8-46 かてしーかわ
- ◎ 11-35 ま物よのぬしのまもん
- ◎ 12-54 あはこんのくせらへ
- ◎ 13-128 あはこんの大や
- ◎ 13-137 やことまり（屋古泊）
- ◎ 14-13 おや国くねふ・しましり
- ◎ 14-14 くめす世のぬし・まふにとの（真文仁殿）
- ◎ 14-26 とよむうへさと

- ◎ 15 - 42 しむの世のぬし
- ◎ 16 - 8 しまちりのみそでんあんし
- ◎ 18 - 31. 32 かなくすく
- ◎ 19 - 47 しもの世のぬし
- ◎ 20 - 1 まもんよのぬし・くめすよしぬし
- ◎ 20 - 2 いしやらたうぐすく・ゆかるたうくすく・いしやらよのぬし
- ◎ 20 - 3 いしやら世のぬし
- ◎ 20 - 4 まふにいしくすく・まふにかなくすく
- ◎ 20 - 5 はひら・ふくじ
- ◎ 20 - 6 よきあかり
- ◎ 20 - 7 ゆかるたらすさへ
- ◎ 20 - 7. 11. 16. 18. 19 やまくすく (山城)
- ◎ 20 - 12 あしかわ
- ◎ 20 - 13 やまきし (山内子) ・かねくすく
- ◎ 20 - 15 やまきにや (山内にや) ・ふくし
- ◎ 20 - 21 きこゑおゑさと・とよむおゑさと
- ◎ 20 - 22 きこゑうゑさともり
- ◎ 20 - 23 まかびたらひよもい
- ◎ 20 - 24 まかび
- ◎ 20 - 31 しましり
- ◎ 20 - 34 かねくすくのろ・かねくすく
- ◎ 20 - 42 しまもり
- ◎ 20 - 60 しまのよのぬし
- ◎ 22 - 34 あまつゝ
- ◎ 25 - 6 はひらもりくすく

(5) 通 史

- ◎ 「南山の歴史」 上原佐吉 高嶺村役場 大正4年
- ◎ 「郷土史」 新垣隆一 高嶺村 昭和9年

(6) 参考文献 (南山に関連する事項収録)

- ◎ 「使琉球錄」陳保
- ◎ 「使琉球錄」蕭崇業
- ◎ 「使琉球錄」夏子陽
- ◎ 「中山伝信錄」徐葆光
- ◎ 「琉球国志略・中」周煌
- ◎ 「周煌 琉球国志略」訳注平田嗣全 三一書房 1977年

- ◎ 「黎明期の海外交通史」 東恩納寛惇 琉球新報社 1969年
- ◎ 「中世南島通交貿易史の研究」 小葉田 淳 刀江書院 昭和43年
- ◎ 「沖縄海洋発展史」 安里延 琉球文教図書 昭和42年
- ◎ 「沖縄一千年史」 真境名安興・島倉龍治 琉球文教図書 昭和27年
- ◎ 「伝説・補遺 沖縄歴史」 島袋源一郎
- ◎ 「琉球の歴史」 東恩納寛惇 至文堂 昭和41年
- ◎ 「琉球の歴史」 仲原善忠 仲原善忠選集 上巻 沖縄タイムス 昭和44年
- ◎ 「沖縄の歴史」 比嘉春潮 比嘉春潮全集 第一巻歴史編1 沖縄タイムス 1971年
- ◎ 「琉球の歴史」 George · H · Keer 琉球列島米国民政府 1956年
- ◎ 「沖縄史を考える」 新里恵二 効草書房 1970年
- ◎ 「沖縄文化論叢1 歴史編」 編集 新里恵二 平凡社 昭和47年
- ◎ 「琉球史辞典」 中山盛茂 琉球文教図書 昭和44年
- ◎ 「沖縄考」 伊波普猷 創元社 昭和17年
- ◎ 「島尻といへる名称」 伊波普猷 古琉球 昭和19年
- ◎ 「南島風土記」 東恩納寛惇 沖縄文化協会 昭和25年
- ◎ 「島尻郡誌」 島尻郡教育部会 昭和35年
- ◎ 「沖縄風土記全集 第二巻 糸満町編」 沖縄風土記刊行会 1967年
- ◎ 「座談会 沖縄の古代史を考える」 沖縄思潮第7号 1975年
- ◎ 「沖縄の城 南部編」 沖縄建築士会 1961年
- ◎ 「古代部落マキヨから農耕村落への発達」 稲村賢敷 「沖縄古代の生活－狩猟・漁撈、農耕－」 島袋源七 村落共同体 木耳社 昭和46年
- ◎ 「琉球祖先宝鑑」 慶留間知徳 琉球史料研究会 昭和37年

5. むすび

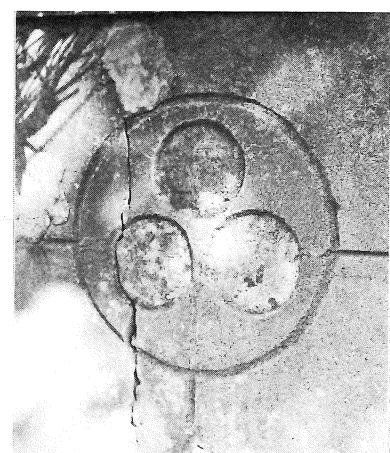
以上、南山城跡の調査に関して主に文献的資料収集の一端をまとめてみたのが本稿であるが、いうまでもなく、これとても不充分であり、今後増補しなければならない。

糸満市文化財保護委員会による「南山城跡とその周辺のグスク」調査は、今後も継続されることおもわれるが、次年度は「考古学的調査」と「民俗・伝承的調査」を実施されることを期待したい。これまで、沖縄の各地にあるグスクに関する考古学的調査は、何回も行なわれたが、グスクの総合調査（考古学的・民俗学的・文献学的・土木工学的調査）は、これからである。

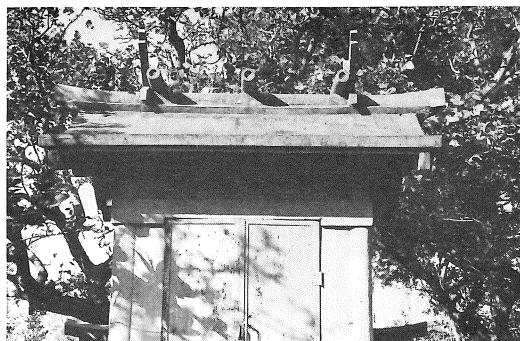
これらの作業をとおして早い段階に、「南山城の展開と周辺のグスクとの関連」、さらに発展させて「地域的共同体としての南山の政治的統合と発展・衰亡」などを概観してみたいとおもう。

大方のご教示を乞う次第である。（1978年3月）

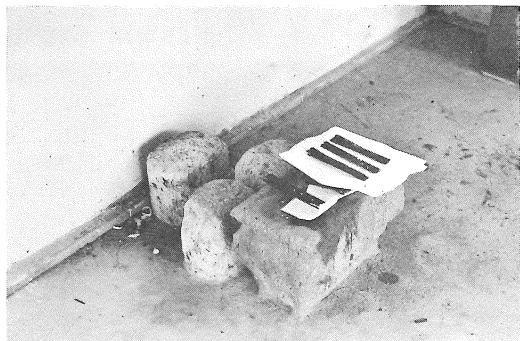
図版 1 南山城跡



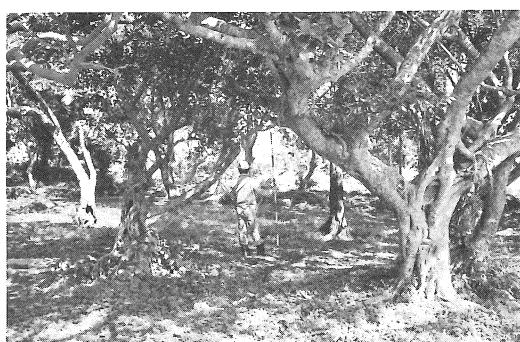
図版 2



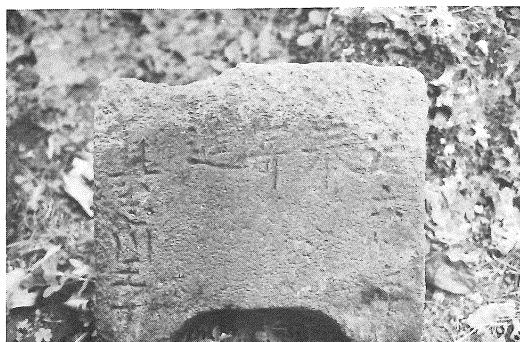
南山神社本殿



南山神社拝殿にある火の神



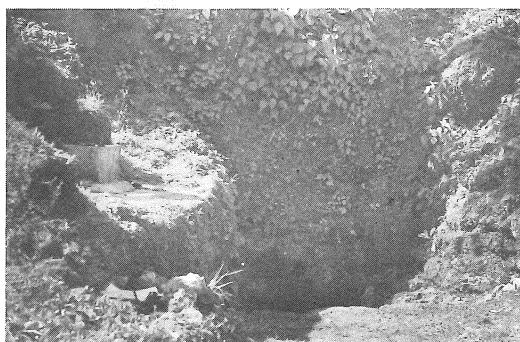
南山城跡の測量



具志川王子寄進の香炉



うび一川



うび一川



かてし川の側にある古泉 (拝泉)



西銘御川

図版 4

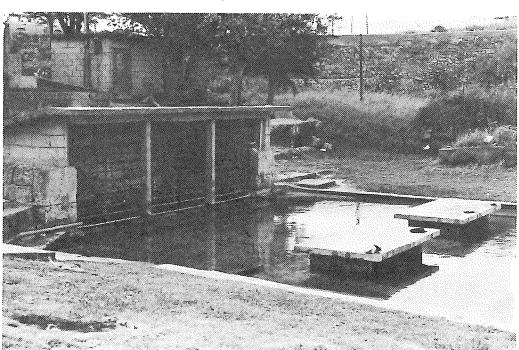
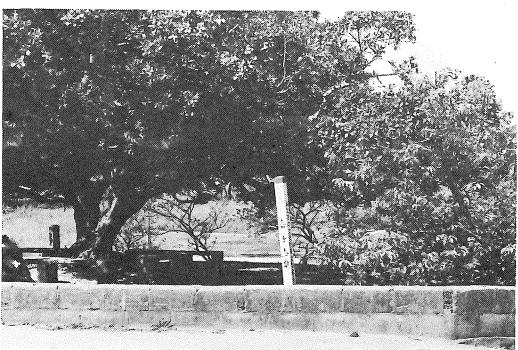


照屋城跡遠景（南山時代の御物城といわれている。）

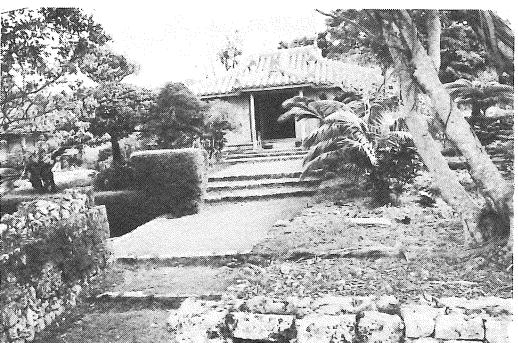


大城 ゲスク

南山 ゲスクと与座岳



かてし泉（か一）



大里 西銘ノロ殿内

大里 山川ノロ殿内

図版 4

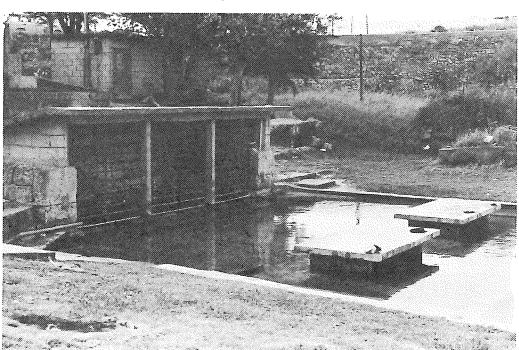
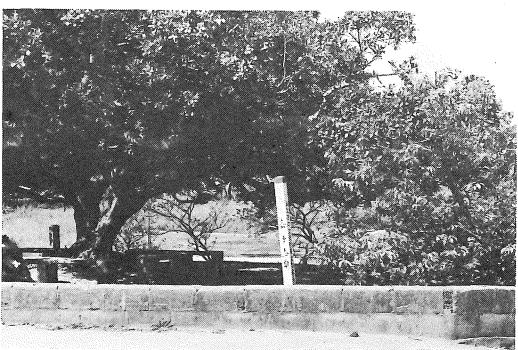


照屋城跡遠景（南山時代の御物城といわれている。）

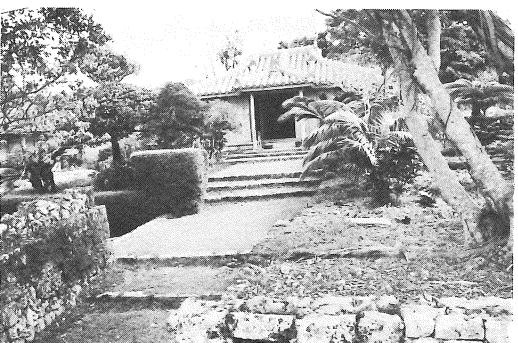


大城 ゲスク

南山 ゲスクと与座岳



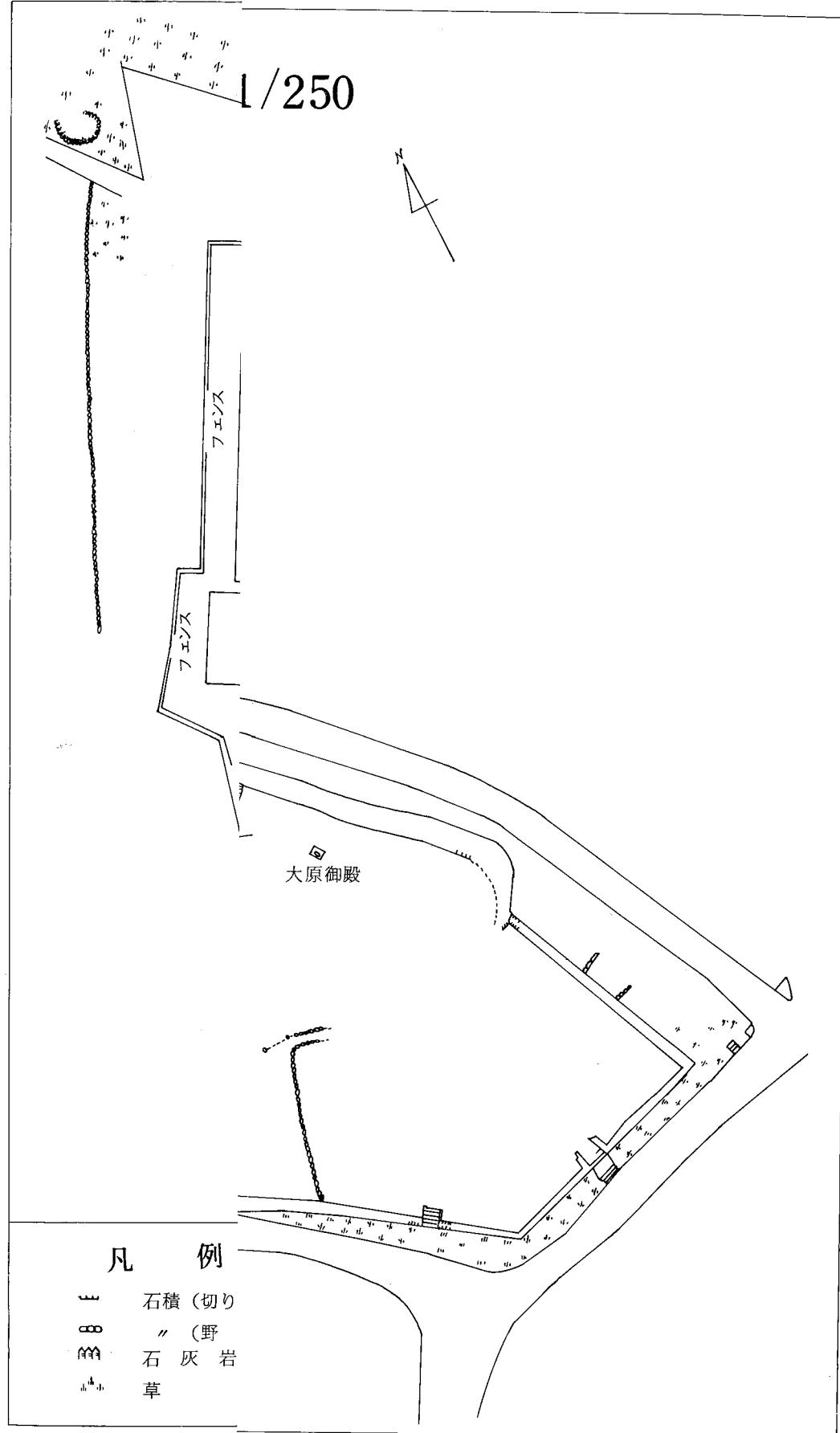
かてし泉（か一）



大里 西銘ノロ殿内

大里 山川ノロ殿内

1/250



第4図

南山城址平面図

S = 1/250

